

書評

手打明敏

『近代日本農村における農民の教育と学習』

上田幸夫*

おいしいお米の代表格は「コシヒカリ」というのがすっかり広まったように、おいしいお酒の元となるお米の代表格は「山田錦」。それとともに、山形県庄内に育まれた「亀の尾」もまた酒づくりの品種として、人気を博している。これらの米の品種ができあがるまでには、幾多の品種改良が続けられたに違いない。

おいしい酒づくりにかける品種改良の一方で、災害に強いイネや、穂に大量の稲がつくような品種改良も大きな関心事で、生産性を高める米づくりは、精魂込められた営為であったといえよう。

そういう米づくりにかける農民の労働過程には、農民どうしの経験の交流や生産性を高める実験など、生産にかかわるチエや工夫が交差し、明らかに農民の認識の形成が展開していた。すなわち、農民の生活や労働の場における生きた学習活動の存在が確認できる。

おそらく、著者はこのような推論を土台に、農民の学習実践の世界へ足を踏み入れたのではなかろうか。農民のしたたかな態度に信頼を寄せて、近代日本の農民の労働過程に即した教育・学習活動を描いた教育史研究書、著者の学位申請論文の公刊となる本書が仕上がったのである。

社会教育学と社会教育史学—本書の研究課題

本書の全体はじつに丹念な史資料の読解に向けられているものの、著者の問題意識には、次のような社会教育研究におけるパラダイム転換を企図しているかのごとき様相が見受けられる。

従来の農民教育研究、さらには社会教育研究の習性は、農民を単に教化政策の対象でしかとらえていないことや、それとの対抗関係において展開する学習活動のみを問題にし、農民自身による農業生産力向上を意図した技術習得のための教

※日本体育大学体育学部

育・学習活動への眼差しは乏しかった。加えて農村事業は農林省系統に水路づけされ、近代日本の農民の社会教育は、行政による教化活動の伝統ゆえに、労働にかかわることもなければ、知識・技術とも無縁の思想善導的教育・学習観に基づいていた、そういう研究のあり方を著者は問題にしているのである。

このような研究の習性を抱え込んだのは、日本の社会教育概念がすぐれて「行政的」観念に覆いかぶさり、社会教育は「徹頭徹尾官府的社会教化事業」（碓井正久、『社会教育』、東大出版、1970年、75頁）という社会教育史観に強く影響されていたからであると著者はいう。

そういう問題意識を携えた著者は、近代日本の農村社会に生きた農民の、地域における生活に結びついた学習活動に目を向けることによって、近代日本の戦前の社会教育が単に思想善導、非職業的学習活動に限られていたという学説を解き放ち、農業という労働に結びつく知識や技術の習得をめざす学習活動の存在を丹念に検証していくのである。

ところで、著者・手打氏の研究系譜を紐解くと、たしかに以上の問題意識に繋がる研究関心が読み取れる。たとえば、社会教育が行政との深い関連をもつ日本の場合と対置されるイギリスの成人教育において、教育行政の果たしている役割に光をあて、「民間主導」のイギリス観の修正を提起した「1920年代イギリス成人教育における L. E. A の役割」（1978年）や、戦前の官府的教化事業で埋め尽くされていると思いきや、民間事業の生きのよい活動を活写した「大正末・昭和初期における民間社会教育事業に関する考察」（1981年）など、本書に描かれる問題意識に繋がる論稿が発表されているのである。

じつは、私はこの2論文に強い印象を受けて、このような問題意識と絡み合う今回の上梓は、徹底した論証材料を開示しての問題意識の発露とも受け止めたのであった。

本書の構成と内容

本書の構成は以下のとおりとなっている。（節は省略）

序章 本研究の課題と方法

第1部 近代日本の農事改良と農民の取り組み

第1章 明治前期の稲作改良農法受容過程における農民の教育と学習

—『大日本農会報』の記事をとおして—

第2章	福岡農法導入過程にみる農民の教育と学習 —山形県庄内地方の場合—
第3章	明治後期、「東北型」農村における農事改良と農民の教育と学習 —『荘内農事改良史』の考察—
第4章	明治後期・大正期における「西南型」農村における農事改良と農民の教育と学習 —愛媛県温泉郡余土村を事例として—
第2部	農事講習会の展開と農民の教育と学習
第5章	農事講習会の性格
第6章	農事講習会の教育と農民への期待 —農事講習会議事録・教科書・筆記の分析を通して—
第7章	農事改良団体の組織化 —山形県庄内地方の事例として—
第8章	農事講習会と農事改良団体 —愛媛県を事例として—
第9章	近代日本の農事改良における農民の教育と学習の関連 —山形県西田川郡と愛媛県温泉郡余土村の事例を通して—
終章	本論文のまとめと今後の課題
資料	

全体は2部構成で、第1部の明治から大正期にかけての稲作農法の普及・定着過程における農民の教育・学習活動の分析（第1章～第4章）と、第2部の明治30年代以降の「農事講習会」を通しての組織的な農事改良教育の実態と、農事講習会修了生によって組織された農事改良団体の活動の分析（第5章～8章）によって構成されている。論証する手掛かりは、「大日本農会報」や農民の農事改良体験報告書、さらには農事講習会教科書等の関係文献の分析であり、「農民教化」学説の下敷きになっていた『農業雑誌』（学農社）や『中央農事報』の記事は、政策的なメッセージの具現化であって、農民の「実態」を読み取ることはできないと退け、リアルな農民の実態が描かれて資料的価値が認められている「道府県農会報」を採用している。分析対象となる舞台は山形県庄内地域と愛媛県温泉郡余土村（現 松山市）に絞られ、現地インタビューなど「現場に出かけ現場で考える」

(あとがき) 方法が駆使されている。本書の醍醐味は、さも同時代の人々との交信を経て検証したかのような徹底した実証性にあるのだが、章ごとに概略を示すと次のようになる。

第1章では、明治10年代から20年代にかけて「老農農法」から「学理農法」への推移の過程を「大日本農会報」の資料に求め、明治の農民の教育・学習活動を探り当てる。明治30年代以降の明治農法の普及の背景に農民の学習活動の存在を突き止めるのである。

第2章では、実際に明治30年代以降の農事改良に取り組んだ山形県庄内地方の2人の農民の教育・学習活動を追っている。それに引き続いて、第3章では、同じく『庄内農事改良史』という農民の農事改良体験報告書を通して、農民の教育・学習活動への接近を図っている。第4章では、庄内から舞台を愛媛県余土村に移して、明治から大正にかけての農民の学習へと進めていく。

2部はもっぱら「農事講習会」にかかわる学習活動の展開である。まず、第5章では、4県（山形県、愛知県、島根県、愛媛県）の農事講習会の開設状況の分析から、農事講習会の基本的性格を押さえ、第6章では、農事講習会の教育内容の考察へとすすむ。その手法は徹底していて、明治30年から44年までに刊行された農事講習会関係文献31冊すべてに当たり、土地改良、肥料、病虫害、稲作栽培等の学習内容分析が重ねられている。

この講習会の意義は、農事講習会修了生を中心にした農事改良推進団体を組織しているところに着目して、農事改良団体の活動実態を追った第7章は、山形県庄内地方が考察の対象に、第8章は愛媛県余土村の農事改良団体の組織化をとらえて、そこでの教育と学習を明らかにしている。

最後の第9章では、山形県庄内地域と愛媛県余土村を事例に、農事講習会や農事改良団体において学習を積んだ農民が、地域の農業指導者としての役割を担っていくことが明らかにされている。大正期に地域で活躍した、「普通の農民」の地道な学習活動に光をあてることになったのである。

農民の階層・意識と教育実践の全体性—本書の二つの研究課題

明治30年代以降、農事講習会が全国的に開設され、稲作農業にかかる技術指導・知識普及が、丹念な資料の読み取りによって示された本書なのだが、そのことで直ちに「農民の自発的で主体的な教育と学習が近代日本農村社会に存在した

ことが明らかにされ」(本文29頁)、従来の研究の修正を迫ることができるのだろうか。それは結局のところの、次の2点が方法論上の課題として著者に問われるのではないかと考えるからである。それこそが本書の意図であり、同時に課題でもある。

その一つは、農民の階層論についての課題である。

従来の研究の修正を迫るといったような挑戦的な問題意識にあっては、ひときわ丹念な手続きが求められるものの、「問題の所在」(序章 第1節)には、従来の研究の問題部分を詳細にはぐす過程が乏しく、これに連鎖する「研究課題」や方法論上の手続き(序章 第3節)にも、やや簡略な記述に止まっているように思われる。本書が取り上げる農民の階層と従来の研究が取り上げている階層とは明確に異なるとの指摘を加えておきながら、そこから演繹されるであろう推論への配慮などが、もっと言及されてしかるべきであったのではなかろうか。

農事講習会や農事改良団体に所属して一定の役割を担うことができるというような農民は、地域の数ある農民のなかでも限られているはずである。本書が取り上げている「農民」とは、「在村の地主や自作上層農」(本文37頁)であって、農民一般ではない。この階層の農民は一定の経済力をもち、農事改良のための学習活動の社会基盤をもつ層である。農民の学習活動分析にとって、ことのほか重要なファクターというべき点である。

しかも事例分析の山形県庄内地域や愛媛県余土村は、本書の中でも明らかにされているように、全国的にみても豊かな稲作基盤をもつ地域であり、ともに歴史的に蓄積のある地域である。たとえば両地域は、戦前からの蓄積の上に戦後の公民館を展開させて、戦後いち早く「優良公民館」として全国表彰をうけているのである。1947年の優良公民館に選ばれた愛媛県余土村公民館は、戦前に建設された「郷土館」を転用して出発したものであり、さらに戦前は「模範村」としての表彰を受けた代表的な地域であった。

そういう豊かな蓄積を残す地域の在村地主層の学習活動であっては、農民の学習活動とはいえ、一定の「制約」があつてしかるべきではなかろうか。圧倒的多数の中下層の農民層の学習活動は、本書から容易に類推しうる範囲にないというほかない。

農民教育の代表作である浜田陽太郎の『近代農民教育の系譜』(東洋館、1973年)において、その研究の対象としてとらえていた農民層は、中下層である。中

下層農民に向けられた教育活動が「教化的」であって、本書の対象とする上層農民層が学習活動に専念できたということであれば、いわば土俵の違いに過ぎないということになる。近代の農民の学習活動を「浜田の農民教育の論理だけでは説明できない」（本書19頁）のであれば、同じように本書の取り上げる農民層だけでは、農民の学習の実相はとらえられたことにならないことになる。

ただ、著者は寄生地主層と在村の地主層とを峻別して、両者の農村社会へのかかり方の差異に着目し、在村地主層の果たした独自の役割への探求は、今後、農村地域の学習組織論の深化において重要な足場を築くことになるものと期待する。今後、著者の再論を期待したい。

第二の課題は、農事講習会そのものの学習過程にからむ問題である。開設期間は1～2週間ほどであり、講義内容は稲作に関連した「土壌」「肥料」「病害虫」等である。そのさい、本書では、講習会の教育が単純に機能的な学習で埋め尽くされていたような読み取りに、あまりに素朴な講習内容を想定しているように伝わって来るのである。しかし、近代日本の歴史事情を勘案すれば、単純な知識・技術の伝授には止まらない意識の形成にからむ「考え方」などの話題が、当然刷り込まれていたことでなかろうか。それほど近代日本農村における農民の知識習得の学習空間は、生活意識のありようとの関連に配慮が求められると考えるのである。

戦前の明治から大正期にかけての農民にたいして与えられる農事知識・技術には、近代日本の色合いが含まれて、たとえば「農民教育の最大の目的を人生観育成」（浜田陽太郎、前掲書、4頁）等、含みのある多義性を兼ね備えたところに日本の農民教育の独自性を、無視するわけにはいかないのではなかろうか。

以上2点にわたる今後の課題提示によって、本書の高い実証性をもった評価が、いささかも揺るがされることがないのはいうまでもない。

手打明敏『近代日本農村における農民の教育と学習』

日本図書センター，2002年，5400円